

## ミャオ族の麻文化

### 製作・着用・儀礼の変化から

宮脇千絵(総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻)

衣装や布は、着用という本来の役割だけでなく、贈与交換や崇拝の対象となることで、人々の関係を築いたり、そこに埋め込まれている社会的あるいは政治的な意味を表象してきた。しかし、生活のあらゆる側面でグローバル化がすすんだ現在、従来のようにローカルなコミュニティのみで製作、消費されている事例は少なくなってきている。布の製作という領域が変化することで、着用法やその象徴性までを含めた消費の領域はいかなる影響を受けているのだろうか。

本発表では、中国雲南省の少数民族ミャオ族を事例に、彼らの衣装の素材となってきた麻(大麻)が近年急速に減少している現象を取り上げ、そのことが服飾としての役割およびそれ以外の部分にどのような変化をもたらしているのかを考察する。

「ミャオの布(ドウ・モン)」といえば即ち麻布(ドウ・マン)を意味するほど、麻は古くからミャオ族の衣の問題を支えてきた。雲南省文山には、もともと苧麻が自生しているのみであったが、移住してきたミャオ族が大麻を持ち込んだと言われている。焼畑農業を営みながら比較的短期間で居住地を変えてきたミャオ族にとって、一年草である大麻はその生活環境に沿ったものであった。周辺に居住する他の民族が麻をほとんど使用してこなかったのに対し、ミャオ族は麻と密接に関わってきたのである。

麻栽培と布づくりは女性の仕事である。4月に栽培し、8月ごろに刈り入れ、繊維にして布を織る。衣装のそれぞれの部位によって、藍による口ウケツ染めを行ったり、刺繍を施したりする。これらの作業は工程も多く、長い時間がかかるばかりか、忙しい農作業の合間に行なわなければならない、女性にとって大きな労働負担となっていた。

ところがこの10年ほどで、麻の栽培および麻による衣装製作はほとんど行われなくなっている。その背景の一因としてミャオ族をとりまく生活スタイルの変化が挙げられる。商品作物の栽培の増加、教育や出稼ぎの機会の増加、それらによる現金収入の増加と、それらと呼応する衣装製作にかかる時間の減少である。また1990年代以降の政府による麻栽培の禁止政策も無関係ではない。なにより当のミャオ族たちが、このような現状を「麻に割く時間と労力が減って嬉しい」と言っているのである。1990年代初期から、既製のミャオ族衣装が定期市などで販売されるはじめ、現在ではわざわざ布を手織りせずとも簡単に化繊布や衣装を入手することができる。みなで集まっておしゃべりしながら布作りをしたかつての思い出を懐かしむのは老人だけで、村外に行動範囲を広げている若者にとっては製作に関わる労働のみならず、重量のある麻の衣装の着用からも解放されることは、喜ばしいことなのである。

だが一方で、麻は衣装としてだけでなく、あの世とこの世を結ぶ存在として使用されるなど、ミャオ族の生活に着用以上の意味を帯びながら深く関わってきた。それが顕著に現れるのが葬儀である。例えば死者には麻の履物を準備することが重視される。それを履いていないと、先祖のいるあの世にうまく辿りつくことができない。また麻を持っていないと、あの世に行く途中でトラに襲われてしまうと考えられている。そのほかにも葬儀の各儀礼の様々な場面で麻の衣装、布、糸が使用される。「麻から解放された」彼らも、身近な死者に麻を準備できなくなることを恐れ、現在も少量の栽培を続けていたり、ストックを蓄えている。

ミャオ族の衣装の素材として特徴づけられてきた麻は、手軽で洗濯も楽な化繊布にしたいに取って代われ、製作の領域は大きく変化している。しかし、彼らは麻を完全に捨て去ったわけではない。

本発表では、これまでミャオ族が麻をどのように利用してきたのか、それが減少することで服飾文化がどのように変わっているのか、さらに儀礼での使用にどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。

【 ミャオ族、麻、服飾、葬儀、変化 】